

第7回第5次市民自治推進会議

会議録

日 時：2024年9月26日（木）午後6時00分開会
場 所：札幌市役所本庁舎 12階 4・5号会議室

1. 開　　会

○事務局（藤田推進係長）　お時間となりましたので、第7回第5次市民自治推進会議を開催いたします。

事務局の藤田と申します。よろしくお願ひいたします。

本日は、山崎委員、大村委員が欠席と聞いております。

それでは、お手元の次第に沿って進めたいと思います。

次第1の議事からは鈴木座長にお願いしたいと思います。

よろしくお願ひいたします。

2. 議　　事

○鈴木座長　皆様、お疲れさまでございます。

本日も、お忙しい中、お集まりをいただきまして、誠にありがとうございます。

慣例によりまして、私が司会進行を進めさせていただきますので、よろしくお願ひいたします。

お手元の次第に沿って進めてまいります。

それでは、議事に入ります。

前回の8月7日に開催いたしました第6回会議では、成人の日行事に関するアンケート調査結果の概要等、また、成人の日行事の在り方に関する議論の方針等について議論をいたしました。

本日は、前回の議論を踏まえまして、最初に（1）の未来の成人式を考える市民会議の内容（案）について議論を行ってまいりたいと思います。

それでは、事務局より資料のご説明をお願いいたします。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長）　資料につきましては、1ページから4ページまでが該当ページとなります。

10月27日と11月4日に開催を予定しております市民会議の内容について、事務局としての案をまとめましたので、ご説明をさせていただきます。

なお、当該会議の運営を担う委託業者につきまして、さきに一般競争入札を行い、契約候補者を決定したところでございます。本日は、内容についてご議論をいただきまして、ご了承をいただきましたら、その委託業者と協議しながら細部を詰めてまいりたいと考えております。

まず、1ページをご覧ください。

目的は、成人式の在り方検討と市民参加の仕組みづくりの結果の活用です。

次に、日時と場所ですが、両日ともに9時半から17時まで、札幌グランドホテルの地下1階クリスタルホールでの開催を予定しております。

第1回は10月27日日曜日で、ミニ・パブリックスの手法により実施をいたします。

第2回は11月4日月曜日の祝日です。形式は、前回会議でご提案させていただきました

とおり、年代ごとの参加者数を一定にする方法としたいと考えております。

次に、実施体制ですが、主催は札幌市です。また、かねてより、名古屋大学大学院環境学研究科の三上直之教授に、当該市民会議の実施方法について、専門的な見地から事務局に対してご助言をいただきました。引き続き、会議に向けてフォローをしていただくために、正式なご協力の手続を取っているところであり、三上教授のご協力も得ながら実施をしたいと考えております。

次に、参加者と抽出方法です。各回、18歳以上の札幌市民40人を定員として募集をしておりまして、2段階で抽出する予定です。

抽出の方法ですが、第1段階では、住民基本台帳を用い、3,000人を無作為抽出しております。また、事前アンケート調査の対象となりました19歳の市民3,000人と合わせ、計6,000人に対して案内状を9月11日付で送付しております。

なお、応募の締切りは9月30日としておりますが、今朝の段階で170名を超える方から応募をいただいておりますので、参考までにお伝えをさせていただきます。

次に、第2段階では、第1回会議の参加者については、札幌市全体の縮図となるよう、年代や性別、居住地域、職業などの属性のほか、地域活動への関心度合いや会議での議論に慣れているかどうかを考慮して抽出することを予定しております。第2回の会議の参加者につきましては、10代から70代の各年代の参加者数を一定とし、そのほかの属性は第1回と同様の観点からの抽出を予定しております。

2ページをご覧ください。

テーマと論点についてです。

事務局において、市民へのアンケートや地域へのヒアリング結果を基に、会議テーマとそれにひもづく3つの論点、そして、論点ごとに1つから3つの問い合わせを設定しております。これらは、議論を行う際のほか、参加者が会議前と会議後に行う投票の際、アンケートの調査の際に使用したいと考えております。

まず、テーマについてですが、成人式は今後どのような姿を目指していくのがよいかで設定しております。

表の左側をご覧ください。

このテーマに基づいて、具体的に三つの論点を設けております。

上から順に、論点1ですが、成人式の方針としております。これは、成人式の目的や意義などを確認し、参加者が何を大事にするのかなど、議論の方向性を共有するために必要な論点として設けました。

なお、成人式の在り方について、包括的かつ具体的に議論をしていくため、この後、改めて触れますが、グループディスカッションの時間では、論点1について話し合った後、各論として論点2と論点3の順に議論し、再度、論点1に戻って最終的な方針を確認、修正する流れを想定しております。

続いて、論点2ですが、実施主体、開催場所、内容を設定しております。方針の共有後

に、これらの各要素について議論することで具体的な運営方法や参加者がどのような体験をするのがよいのかを考えいただきたいと思っております。

続いて、論点3ですが、財源の確保としております。論点1や論点2で議論した内容を実行していくための基盤を整えるため、誰がどのように資金を調達するのかについて議論を行っていただきたいと考えております。

次に、問い合わせに関連する評価項目についてです。

これらは、会議の最初と最後に行う各参加者へのアンケート調査、投票の際に使用することを想定しております。

上から順にご説明しますが、Q1に関しては実施する上でどのような視点や考え方を特に重視すべきだと思いますかというものです、7段階で各項目を評価していただきたいと考えております。

この問い合わせの項目に関しては、右側に列挙しておりますが、例えば、地域へのヒアリングの際に出していただいた意見では、厳粛な雰囲気や伝統文化を認識することが大事なのではないかというご意見があった一方、参加者の満足度を充実させるほか、懇親の場を設けることも大事ではないかなど、様々なお話をいただきました。そういうことを勘案し、評価対象として項目化しております。

続いて、Q2が実施主体で、運営は誰が主体として担うのがよいと思いますかというものです、右側の項目の一つを選択していただくことを想定しております。

特に、地域がこのまま主体となって開催していくのがよいのか、それとも、行政が主体となるのがよいのかが論点になるということは事務局でも想定しておりましたが、市民に対するアンケートや地域へのヒアリングの結果によれば、若者の意見を大切にする、新成人による実行委員会形式のようなものもよいのではないかというご意見もございましたので、ウに項目として設けております。

次に、Q3の開催場所は、どのような場所で開催されるのがよいと思いますかというものです、一つを選択していただきます。このまま区ごとの開催でよいのか、あるいは、1か所に集まって合同開催とするのがよいのかに加え、先ほどと同じような観点となりますが、地域や市民へのアンケート結果によれば、2、3区で集まって合同開催することも検討すべきではないかというご意見がありましたので、項目化しております。

次に、Q4のどのような内容を特に重視すべきだと思いますかは、7段階で評価していただくことを想定しております。項目については、現在、各区で開催されている式のコンテンツを記載しました。区ごとに開催内容は同一ではないのですけれども、主立ったものを記載しております。

次に、Q5の財源は、財源を確保していくために誰のどのような取組が特に重要だと思いますか、重要だと思う順に優先順位をつけてくださいというものです。項目は、資料に列記しておりますとおり、市の補助金のほか、各地域では協賛金などの確保に取り組んでいらっしゃいます。また、市や各地域で寄附を募るのがよいのではないか、企業が寄附を

するのがよいのではないかというご意見などが市民へのアンケートや地域へのヒアリングの際に出されておりましたので、それらを項目化しております。

次に、Q 6 の補助金ですが、この考え方としましては、まず、市からの補助金の額は運営費全体のどの程度であるとよいと思いますかというもので、項目のうちから一つを選択していただくことを考えております。

補助金の額は、財源の確保に関する論点の一つの大きなポイントになると認識しております。例えば、成人式について全額を補助金で負担するとどういう影響があるのか、減らすとどういう影響があるのかをはじめ、トレードオフの関係にあるような事柄も含めて情報提供をすることが参加者の深い議論につながるのではないかと考え、この問い合わせを設定しました。

次に、3ページをご覧ください。

情報提供の計画についてです。

情報提供の時間は会議の前半に設け、議論に必要な情報をバランスよく提供するために複数名の情報提供者によるレクチャーを予定しております。具体的には、先ほどの2ページでお示しした問い合わせに対応する必要となる情報提供の要素を表の中に列挙しております。

上から順に、Q 1 については、重視すべき点、方針ということで、幅広く成人式の目的や意義、それから、札幌市やほかの自治体の実施状況、市民アンケートの結果などの基礎的な情報を札幌市から説明したいと考えております。なるべく堅い話に終始しないよう、成人式に関する豆知識のような情報も提供したいと考えております。

次に、Q 2 については実施主体ですが、地域が主催する場合、行政が主催する場合のそれぞれの利点、課題、それから、新成人による実行委員会の形式で行っている他自治体の事例を情報提供したいと考えております。

人選に当たっては、札幌市のほかに、地元の開催にかける思いのある地域の方、一方で、行政が開催すべきというご意見も地域の方から紹介していただきたいと考えております。

次に、Q 3 については開催場所ですが、区ごと、合同開催の場合のそれぞれの利点と課題に加え、可能であれば2、3区が集まって合同で開催する場合のシミュレーションなども行い、情報提供したいと考えております。

なお人選についてですが、Q 2 と同様の観点から、地域の方々にもお話をいただきたいと考えております。

次に、Q 4 の内容については、Q 1 の方針、重視すべき点の中の説明に包含されると考えておりますが、各区の式典の内容や他都市の状況などについて、札幌市から情報提供したいと考えております。

次に、Q 5 の財源とQ 6 の補助金については、地域の実施委員会の財政運営の状況に加え、札幌市としての全体の予算の考え方や補助金の考え方などもお伝えし、議論していくだけるように準備を行ってまいりたいと考えております。

人選についてですが、札幌市の担当者のほか、実際に予算の確保に取り組んでいらっしゃる方々との連携を図るために、まずはこの段階で連絡を取り合っておりました。

やる地域の方にもお話をいただきたいと考えております。

最後に、4ページをご覧ください。

まず、一番上の会議の進め方です。

メインファシリテーターが全体司会を務め、テーブルファシリテーターが各グループの議論を支援するという体制になります。

具体的な内容をプログラム案として記載しておりますので、流れに沿ってご説明いたします。

まず、9時半からオリエンテーションを行い、会議の趣旨や流れ、ルールなどの確認をいたします。そして、アンケート調査を行います。このアンケートの内容は、資料の2ページでお示しした問い合わせに各参加者に回答していただくものです。

次に、10時からアイスブレイクの時間を設けます。自己紹介を兼ねて、成人式の印象などについてお話をいただくことを想定しております。

次に、10時15分からは情報提供を行います。論点1から論点3について、3ページでお示しした考え方に基づき、情報提供者から説明します。また、動画も放映する予定です。集中力が切れないよう、各論点を10分間の動画にまとめ、その後、5分間のフリートークの時間を設けます。これを3回繰り返します。そして、動画に関しては、音声だけではなく、テロップなどを用い、重要な情報を視覚的に認識できるような工夫も行いたいと思っています。

次に、グループディスカッションの時間についてです。

第1部から第3部まで、各1時間のディスカッションを3回行う構成にしております。この3時間の使い方ですが、先ほど少し触れましたとおり、まずは論点1について話し合っていただいた後、論点2、論点3の順に議論していただき、再度、論点1に戻って最終的な方針を確認、修正する流れを想定しております。

11時からの第1部では、グループディスカッションを開始した後、途中に12時からお昼休憩を挟みます。そして、13時から再開し、14時からは全体会議を行う予定であります。

全体会議では、第1部と第2部のディスカッションで出た疑問点や意見について、行政職員や地域の方に質問していただき、応答することを目的としております。

この全体会議は、今申し上げたように、市職員のほか、地域で成人の日行事に携わっている方、10区がありますので、お1人ずつに参加していただきたいと考えております。そして、その方に参加者からの質問に応答していただくことを想定しております。万が一、質問や意見が出ないようであれば、少しでも後の議論が深まるよう、メインファシリテーターから話題を振っていただくことも想定して準備したいと考えております。

第3部では、全体会議の結果を踏まえ、再度、議論を行っていただきます。

そして、グループディスカッションを終えた後は、16時から各グループで出た意見を発表してもらいます。時間の関係もありますので、各テーブルのファシリテーターがまとめて発表するという想定です。

グループディスカッションの後の発表をどのようにまとめていくのか、投票の方法をどのようにするのかについてはこの会議の中でも検討課題とされてきました。

グループからの発表についてですが、短時間で結論をまとめ上げるのは難しい作業であるものと認識しております、基本的には、論点ごとにその日の議論の中で出た意見を発表していただこうと考えております。

一方で、米印に記載をしておりますとおり、合意形成ができるのであれば、ぜひチャレンジをしていただきたいと考えておりますし、論点全てとは言わないまでも、この論点についてはグループとして合意形成が図られたという結果が得られたグループがあれば、その旨を発表していただくのが望ましいのではないかと考えております。

そして、投票についてですが、発表の後の16時半から17時の時間帯に行います。一日の振り返りとアンケート調査を予定しております、この最後のアンケート調査において最終的な結果を回答していただきます。これを各論点への投票としたいと考えております。

なお、最後のアンケートについては、会議の運営自体への感想やファシリテーターについての設問も設けたいと考えております。

1日の流れについては以上ですが、補足として、第1回目のミニ・パブリックス形式の会議は丸一日同じグループで議論をする想定でおりますが、第2回目は、第1部と第2部までが同年代のグループでの議論、第3部は年齢を混成する予定です。

次に、会議の記録についてですが、資料に記載のとおり、情報提供資料や会議全体の様子を記録した映像を市の公式ホームページ上で公開したいと考えております。会議の参加者には事前に了承を得た上で可能な範囲で実行します。

最後に、結果の公表と活用についてです。

結果は報告書としてまとめ、公表するとともに、市の今後の取組の検討や関係者とのさらなる議論に活用したいと考えております。

事務局からは以上でございます。

ご議論のほど、よろしくお願ひ申し上げます。

○鈴木座長　ただいま、未来の成人式を考える市民会議の内容（案）についてご説明いただきました。

それでは、ご質問等も含めましてご意見をいただきたいと思います。

○オブザーバー（斎藤広報部長）　3点ほど確認ですが、まず、1グループ何人ぐらいの想定ですか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長）　6名から7名ぐらいです。

○オブザーバー（斎藤広報部長）　2点目ですが、当日はアンケート調査を最初と最後にやるということでしたね。これは、その場で集計し、皆さんにフィードバックするのですか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長）　そこは委託業者と相談かなと思っています。例えば、デジタルを活用できる場合には即座に画面上で発表することも可能であると考えて

おります。

○オブザーバー（斎藤広報部長） 3点目ですが、論点1に必要性の項目があつて、廃止か継続かを聞くことになっていますよね。募集し、自由に参加していただくので、廃止したほうがいいという方がそれなりにいらっしゃっても不思議ではないかなと思うのです。

その上でお聞きしたいのですが、廃止したほうがいいという方には、論点2以降の話にはやる前提で参加してくださいという呼びかけをするのでしょうか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 非常に難しいところですが、廃止がいいとのお考えであれば、その論調のままお話をいただきたいと考えています。そして、周りの方とお話をしていく中で変化が起きるのか、それとも、最後まで主張を貫くのかということになるかと思います。

○鈴木座長 そのほかに何かございませんか。

○梶井委員 今のご質問にもあったことですが、会議後のアンケートの投票結果をみんなにお見せすることができるのであれば、そういうやり方もあるのかなと思います。そうすると、全体がどういうことに合意しているのかをその場で見せることができます。そうしたほうがいいのかどうか、その意義については私にも分かりませんが、そこは最後に詰めなければならぬところかなと思いました。

それから、ご説明もありましたけれども、振り返りのとき、この市民会議に参加した満足度についてもアンケートに入れるということでした。これは欠かせないものだと思います。時間がないとしても、会議についてのアンケートに関しては、別途、参加者が家に帰ってからゆっくりと振り返ってもらって回答してもらうというやり方もあるかもしれません。ここも詰める点かなと感じました。

○事務局（川村市民自治推進課長） 今いただいたご意見も参考に、アンケートの回収方法などについてこれから考えていきます。

○鈴木座長 そのほかに何かございませんか。

○片山委員 こういうやり方が既にあるのかは分かりませんが、財源についてです。祝ってもらうという色合いが強い会なので、ここに挙がっている5つの寄附や助成が大枠になると思うのですが、プラスして自分で参加費を払うということはほかの自治体でやっていないのでしょうか。それも議論の俎上にのせてもいいのかなと思ったのですけれども、どうでしょうか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） アンケートでは、例えば、参加者から徴収したらしいのではないか、親御さんも一緒に参加し、親から徴収したほうがいいのではないかといったご意見もありましたので、今いただいたご意見も項目に反映したいと考えております。

○鈴木座長 そのほかに何かございませんか。

○事務局（神市民自治推進室長） 私から一つ確認です。

16時からの発表のことについてです。

グループごとに合意形成が図られるのであればそこまでという話でしたが、先日、名古屋大の三上先生からの助言で、今回ぐらいの中身であれば結論をグループごとに出せるのではないかという話があって、こういう書き方をしています。これについて、できればやつてほしいという導き方にするのか、当初からグループとして結論を出してくれと言うのかです。

一方では、先ほどもありましたが、投票結果を皆さんに見てもらうということであれば、そこにグループでの結果はどう反映するのか、今、私も聞いていて迷っていますので、その議論をしていただければと思っています。

○鈴木座長 合意形成について、どのように進めていくかということだと思います。

以前の議論にも出ていましたように、ファシリテーターの方の力量にもよるとは思うのですが、できるだけ合意形成に持つていってほしいとお願ひしておくということはあるかもしれません。もしくは、ある程度の統一感を持って、できるだけ無理に進めるではなく、参加者が主体的に合意形成のほうに向くのであれば、その方向でお願いするということもあります。表現が難しいのですけれども、そうしたことも含め、ご意見があればお願ひいたします。

○梶井委員 私は、やっぱりファジーなほうがいいと思います。

グループによって特色が違ってくると思うので、全てのグループに対し、とにかく合意形成を目指してくださいと規定しないほうがえっていいのではないかと思います。

また、先ほども片山委員から財源の項目を増やしたらどうかというご意見がありました。例えは、成人式なんかは廃止したほうがいいという強い意識を持ってここに参加される方もいらっしゃるかもしれませんよね。その一方、参加費は絶対に払ったほうがいい、市の財政だって大変なのにといった強いご意見をお持ちの方が入っているグループもあるかと思います。そういう意味では、いろいろな形の結果が出るかもしれません。それに、それはそれで私たちの一つの経験値になりますから、いろいろな方の意見の形態や議論があるということも踏まえ、各グループでの統一的な目標については、ファシリテーターの方にはある程度のことは申し上げておいたとしても、最終的にはその流れの中でファジーな結果でも結構ですという着地がいいのかなと思います。

○鈴木座長 今回は、グループごとや会議の中で結論を出すのが目的ではないような気がいたします。無作為抽出で選ばれた市民の方々がどういった意見や考えをお持ちで、全体の割合と言うと細かくしがれども、どういった意見を持った方がどれくらいいるのかを把握し、補助金などのことも含め、今後の市の成人式の施策を進める上での参考情報にしていただくということだと思います。

ほかの委員の方々からもご意見を伺いたいと思います。特に、ファシリテーションについてですので、三上委員からもお話を伺いたいと思います。

○三上委員 今出た話がほとんどだと思うのですが、今回、最終的な目的というのは鈴木座長がおっしゃったとおりで、何を大事にするのか、それはなぜなのか、それぞれの参加

者がその違いを明らかにしていくことがゴールなのかなと思っています。

その上で、その人のこだわりが細かく出る形での投票というのは、多分、オリエンテーションの前にやったほうがいいと私は思っています。今日は何をやるのか分からずに来ていても、このことについてどう思うのかというのを素の状態で、前提なく、直感でやってもらうのが一番よくて。そして最後に同じ項目でアンケートをまたやるわけですよね。

そのときに、できれば、一番最後のところに同じ項目で、紙でやるなら紙でもいいのですが、全体としてあなたのイメージしている成人式を言葉で書いてくださいとか、これ(現状のアンケート案)は決まった言葉をただ選ぶだけなのですが、最後にその人を解放してあげるのです。文章で書くのか、詩で書くのか、絵で描く人もいるかもしれないですが、同じ議論をやって、同じ項目で評価をしたけれども、その選択肢を選んだ後に、自分の中でまとめてどう思うのかを書いてもらうのもいいと思います。

先ほど合意形成という話が出ていました。きちきちと決めて論点整理をするのですけれども、みんながやりたいと言っている気持ちもあるのだから、こういうところでやらせてあげたいなど、一つ一つの論点ではかちっと選択するのですが、最後は若い人の思いにお任せしたいなど、そういう思いになってくるので、そこも大事にしてあげることです。

つまり、データを出し、札幌市がこれを基に決定しましたといつても、納得感の意味でいくと、最後に選択したものと僕はこういう気持ちなんだよという思いに違いが出るので、そういう言葉のアンケートといいますか、余白のあるアンケートも取つたらいいのかなと思います。

それから、廃止したほうがいいと思っている人がその後の議論に入りやすいかという話が先ほど出ていましたが、逆に言うと、廃止したほうがいいと思っている人が細かい論点の中でどんな違いがあるのかを明らかにしたとき、そういう論点もあるのだ、そういう重きの置き方もあるなど、継続したほうがいいと思っている人と分かり合うことで、もしかすると、廃止だと思う人でも最後にはこういう継続の仕方があるのでないかというプラス思考になるかもしれませんので、廃止だとする人でも論点2や論点3にしっかりと入れるように、その人の言葉も受け止めてファシリテーターが進めるということです。この人は廃止だと思っているから、何を聞いても、多分、ネガティブだろうという思い込みを捨て、ちゃんと扱うことが大事かなと思いました。

また、先ほども途中で話しましたけれども、プログラムの進め方として、オリエンテーションというのは第一に主催者からのものなので、そこでバイアスがかかってしまいます。できれば、会場に来て、下手をすると、ネームを書いてください、何を書いてくださいということで開始が5分ぐらい遅れると思うのですが、その準備の中の一つに、全くの素の状態で、中身が分からなくてもいいので、直感で考えて各論点について投票してみてくださいとやるのです。そして、最後に、全部が何となく腹落ちしたり納得がいかなったりする中で、各論点に対して投票することをやるといいのかなと思います。

しかも、振り返りの後に会議後アンケートと書いていますけれども、会議後アンケートをやって、今日の論点について頭を整理して、その後にその日の振り返りをしたほうがすごく充実したものになりますし、そのときに同時に聞くのであれば、会議の内容やファシリテーターの評価もできれば直感で出してもらうと回収率が上がるのかなと思います。

また、合意形成に持っていくかどうかについてです。

梶井委員のおっしゃっていたとおり、緩い縛りにしたほうがいいだろうとは思います。できるのだったら合意形成に持つていてねとファシリテーターに委ねると、合意形成のテクニックを使い出します。フェーズがアイデアベースで終わるか、合意形成に持つていくかで変わるということです。合意形成に持つていくとすると、発散と収束を2、3回繰り返さなければいけないので、ファシリテーションの仕方としても、後半で一気にモードが入り、かなり持つてしまふ人がいるのです。合意形成まで行つたら得点がいいのかな、できるファシリテーターだとその腕が認められると思ったら、今日、私は合意形成まで行くぞとなってしまう(そこをゴールにしてしまう可能性もある)ので、できれば合意形成まで行つたほうがいいということはあまり言わないほうがいいと思います。

合意形成をとなりますと質問がどんどん深くなっていくのです。そうすると、詰問された気持ちになって自由な意見が言えなくなりますし、それは本当はいけないことなのかなと思います。ですから、グループによって特徴が違うというのはそうかなと思いました。

○鈴木座長 ポイントを絞ってお話をいただきまして、ありがとうございます。

最後の点は、今までできればというキーワードがありましたけれども、おっしゃるところ、できればというとやったほうがいいのかなと思ってしまうということですね。表現がちょっと難しいですし、これからいろいろと考えなければいけないと思いますが、もし結論まで至つたら発表してくださいぐらいの緩い形がいいのかもしれませんね。

○三上委員 合意形成をするとなりますと、違いを理解し合つてもらって、さらに、その違いを見る化して、ファシリテーターが、あなたはこの辺ですね、こういう違いがありますけれども、それを寄せられない今、多数決ではこうなっていますが、多数決は気にすることはできませんからとフラットにやるのです。そうすると、その違いは何ですか、何があなたにそう思わせているのですかまで行くと、その人の人生観が出てくるので、本当の意味で合意形成をしようとするとかなりハードなことになると思うので、あまり縛らないほうがいいと思います。

○事務局（川村市民自治推進課長） 今のイメージは、合意形成を目指すのではなく、結果的に合意形成がなされたとき、うちのグループではこういう意見がたくさん出た結果、結果的に見れば合意形成されていましたというようなイメージですか。

○三上委員 それもイメージしないでやったほうがいいということです。

皆さんが思っている合意形成というのは、多分、多数決的に我がグループはこんな感じですねとファシリテーターが何となく要約してしまったら、みんながそうだねという感じだと思います。

○事務局（川村市民自治推進課長）　では、満場一致でこの結果だとなったら合意形成が取れたというイメージですか。

○三上委員　満場一致というと多数決になってしまいますし、その多数決が一番危険なのです。

○事務局（川村市民自治推進課長）　多数決ではなく、たまたま6人、7人が全員同じ意見だったといいますか、そこに落ち着いたとき、うちのグループでは全員で意見がまとめましたと発表してもらうみたいなことです。そうではなく、合意形成という言葉 자체を使わないほうがいいということですか。

○三上委員　合意形成に対するイメージも違いますから使わないほうがいいと思います。ただ、日本人は、うちのグループではこうですねというとき、いい意見や悪い意見に関係なく、多い意見をまとめて言ってしまいますし、ファシリテーターがそれを一番やってしまうのです。

だから、先ほどは抜かしましたけれども、ファシリテーターが発表すると言っていましたが、ファシリテーターには発表させないほうがいいと思います。こんなにいい意見も出ていましたよとファシリテーターが補足するのはいいのですが、全体発表のときは、そのグループで熱意を持ってやっていた人が誰か1人でも2人でも発表したほうがいいのではないかなと思います。

ファシリテーターが発表すると逆にまとめてしまいます。うちの班ではこうで、こうで、こうでしたよねと言ったら、まあ、そうですねとなるということです。

○鈴木座長　それをまとめないでお願いして、少数意見も含め、うちのグループではこういう意見が結構多かったけれども、こういう意見もありましたと客観的に話してもらえばいいのかなと思います。

一般の方に話していただくことになると自分の意見を中心に話してしまう方もいますし、時間がかかるてしまうというリスクもあると思うのです。

○事務局（川村市民自治推進課長）　今回は時間もきつきつなのですよね。

ただ、今のご意見は何となく分かりましたので、業者とも詰めてみて、また相談させてください。

○三上委員　ファシリテーターがやる場合もいろいろなやり方がありますので、バイアスがかからないように、先ほどもおっしゃっていましたとおり、そのグループの特色がなくならないように配慮することがポイントかと思います。

○事務局（川村市民自治推進課長）　今回は実験でトライするという部分もあるのです。

○三上委員　どうしても（ファシリテーターの発表がいけない）というわけではないので、大丈夫です。

○鈴木座長　合意形成が目的ではなく、今回は変化も見るということも重要視したいと思っています。そういう意味では、三上委員にご提案をいただきましたけれども、今回、事前にアンケートをしていますけれども、その方がどの意見だったかは特定できないわけで

すから、ある意味、全くの素の状態で聞いてみて、最後に皆さんとの議論や情報提供によって意見が変わったのかどうかが見られると今回の実験の意味もあるのかなと思います。最後に自分の思いを表現していただくというのもいいかもしませんね。

○野田委員 最後に座長がおっしゃられたことに私は賛成です。委員の方々のお話にも賛成です。

途中から、熟議など、いろいろな話が入ってきたのですけれども、そもそも何のためにこれを行うのかというと、もともとは学習効果だったはずですよね。何も情報がない中で答えることと行政の方などからいろいろなことを教えてもらいながら自分で考え、自発的に判断した内容に差がある、要するに、学習をしたらこうなりますよということを明らかにすることだったので、ファシリテーターが一定の価値観を持って回してしまうと、それは学習ではないような形になってしまうなとすごく危惧されます。

それから、議論も悪くはないのですけれども、あくまで意見を出させて相手の意見を聞くということぐらいなので、自発的に自分で考えた結果、最後はこうなりましたというものがないと学習効果ではないのかなという気がしています。

議論というと、これはちょっと難しい話ですが、リスク・シフトやコーチャス・シフトのどちらかによるということがよくあるのですよね。でも、議論の進め方で変わったりするのではなく、得られた内容、そして、他者の意見を知ったことによって、自分が最後に自発的に回答するということが今回の趣旨だったかなという気がしています。これは合意形成もそうで、自分はこうした意見だけれども、最後は妥協するというのはオーケーですが、その人の意見に洗脳されるところまでは絶対に駄目かなと思いました。

それから、個人を特定したうえでアンケートを実施しないと駄目かなと私は思っています。個人が回答しているものがどう変わったのかを見る必要があるということです。しかも、アンケートもそれぞれの論点でどれがいいですかと聞くより、私がお薦めするものは、それぞれの論点についてリッカートスケールで1点から5点という感じで聞くと、必ず変化が分かると思いますし、分析も解析もしやすいです。サンプルが40人しかないので、解析結果がきれいに出ないかもしれません、それぞれの論点の選択肢が1か0で得られる分析よりは、リッカートスケールといいますか、尺度になっているほうが分析結果もきれいに出るということがあります。

それから業者にという話があったのですけれども、例えば、合同ゼミとかで数百人が集まったときに、エクセルなどでデータを用意しておき、集約してもらい、ざっと入力してもらっています。時間は若干かかりますが、それで集計結果を出すというパターンでもいいと思います。あるいは、サーベイモンキーみたいなもので集計するということも多分できるのではないかなと思います。業者がこういうふうにやってくれるのであればそれでいいかなと思いました。

それから、財源の話です。

補助金ということが挙がっていれば、それは補助金でやってほしいと普通は思いますよ。

でも、そういうことを聞きたいのではなく、この補助金と言っている財源ももともとはみんなの税金に基づいているので、成人式に使うことによってほかが減るというレクチャーを行政職員の方からちゃんと受けた後にどう変わるかが分かるかで、そういったことがあったほうがいいかなと思いました。

いっぱい言いましたけれども、最後に1点です。

今までいいと思いますが、最初に各論点の投票をして、情報提供を受けて、第2部でディスカッション、第3部でディスカッションを行い、最後にアンケートをもう一回やることでしたよね。第2部の後、第3部の後でそれぞれやるのではなく、情報提供は全部一くくりにして、最後にアンケートをやるという理解でいいですか。それでいいかなという気はしますが、そこについて教えてもらえばと思います。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 今、野田委員が情報提供は最後にやるのかとおっしゃったような気がしたのですが、違いますか。

○野田委員 アイスブレイクの後に情報提供を行って、その後のディスカッションも全部が情報提供ではないですか。ある種、人の意見を受け取るということなので、情報提供がされているということですよね。そして、第2部と第3部が終わって、最後にアンケートをするということですよね。

例えば、情報提供をした後にもう一回やる、第2部が終わった後にもう一回やる、第3部が終わった後にもう一回やるという感じで全部するのかなと思っていたのですけれども、手間がかかるから、情報提供もディスカッションも情報提供と解釈し、最後にアンケートをやるという理解でよいかということです。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 最初の10時15分から11時の間にまとめて情報提供をしますので、各グループディスカッションの前に何かの情報提供をするわけではないです。

○野田委員 そういうことではなく、評価をいつするかということです。

情報の提供を受け、アンケートをするということでも学習効果は分かりますよね。その後にディスカッションをして、アンケートをするということだと、ディスカッションの後のものも見ることができます。グループディスカッションの第1部、第2部、第3部の後でそれぞれアンケートができるのですけれども、手間がかかるから、最後にアンケートをするという理解でよろしいですか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） そうです。最後にアンケートをするということです。

○野田委員 そうなると、行政が情報提供をしたものだけではなく、ディスカッションも全部を合わせた効果になりますが、それでいいということですか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） その日の情報提供と議論の結果を受け、最後にアンケートといいますか、投票をしてもらうという考えです。

○野田委員 分かりました。

○鈴木座長 今、野田委員からご意見があつたことについてです。

非常に手間がかかりますし、結構面倒になってくるのですけれども、私の興味本位もあって、また、今回は実験ということでもありますので、可能であれば、それぞれ、もしくは、間に1回入れて、行政の情報提供の後に情報提供を受けて意見が変わつたかどうかを調べてもいいかと思いました。

それから、グループディスカッション後にもそれぞれ取つたほうがいいかなとは思いますけれども、そこまでは面倒ということであれば、グループディスカッションが第1部から第3部まであるわけですから、それが終わつた後にいろいろなグループでの意見を聞いてまた変わるところもあると思いますので、そういう客観的な情報とグループディスカッションによる情報共有によってどう変わつたかがあるといいのかなと思いました。

○事務局（川村市民自治推進課長） 今、野田委員と鈴木座長のお話を聞いていて、行政と地域の情報提供による効果と議論の効果を分けてみてもいいかなと思いましたので、そこは検討させてください。

○三上委員 ワークショップをやる側としての意見です。

最初は何も分かっていないわけですが、45分間、ずっと情報提供がされるので、その後に認識が変わつた自分を認識するという意味でアンケートを取ると、この後の議論の自分のスタンスが何となく頭の中で整理されると思うのです。ああ、そういうことなんだ、では、自分はこうだというふうに知識を得た自分を認識する、自己評価みたいなものがあるのです。

第1部に関しては、最初、自分はこうだったけれども、こう変わつたということをみんな感じて、もちろん変わらない人は変わりませんが。そこに自分の論点が頭に入るので、そこからグループディスカッションをやってもらうと、ファシリテーターからすると議論が非常に促進されると思います。頭の整理は必ず必要なのです。

ところが、情報提供だけされて、あとはテーブルのファシリテーターでと言われても、みんなはどういう状況なのか、みんなの頭がどうなつたのかがどこにも出てこないのです。しかも、自分でも分かっていないのです。こんなに突き詰められたけれども、私はどうなのかなとなるのです。でも、アンケートをもう一回やってみたら、やっぱり、私は変わらないな、あるいは、ちょっと変わつたなどなります。では、何で変わつたのかについて、その違いをファシリテーターが振れば、その違いが浮き彫りにされるので、特に情報提供の後には必ずやつたほうがいいような気が私はしました。

○オブザーバー（斎藤広報部長） 先ほどの口頭での説明では、11月の第2回の進め方として、まずは同世代で話をして、その後に多世代で話をしてということでしたよね。特に、第2回に関しては、話す世代といいますか、相手が変わつたときに意見がどう変わるか、ちょっと負担はかけてしまつますけれども、それを見るのもいいかもしれませんね。

○事務局（川村市民自治推進課長） いただいたご意見を参考にさせていただいて、アンケートのタイミングについては考えたいと思います。

○片山委員 今、第1部、第2部が同年代で、第3部は、リセットして、新しいグループになるという想定ですけれども、これは10月と11月で変えるのでしたか。

○事務局（川村市民自治推進課長） 11月の第2回目は第1部と第2部の前半が同年代で、第2部の後半と第3部が混成型で、市の縮図といいますか、10代から70代までいる状態であります。1回目は最初から最後まで同じ混成のグループです。これは、前回、同年代で話すことによって話しやすいということがあったので、1回目と2回目で分けて違う方法でやることにしました。

○片山委員 そうだとして、11月のほうのシャッフルのタイミングについてです。

9時半から集まって、15時の段階で新しいグループになってしまふと、グループの凝集性といいますか、今まで信頼して話していた人とは全然違う方と話をすることになりますし、自分とは異なる意見がベースのグループになっているので、ちょっと戸惑うと思うのです。

そこで合意形成はしないとしても、違いに対して共感しないまでも理解できるような議論をしようみたいなファシリテーションはなかなか難しいのかなという気がしました。混合チームにするタイミングは第2部ではなく、第3部がいいのかという議論はしましたか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 混乱させてしまって申し訳ないのですが、資料に記載させていただいています。

11月のほうですが、第1部は年代ごとで、第2部も前半の30分と同様に同世代同士で話します。そして、後半は、グループごとといいますか、年代ごとの意見を発表する時間に充てたいという案だったのです。ここで各年代の考えがある程度分かるのではないかという狙いです。その各年代の出た意見を持ち寄って、第3部では年代を混成して話し合ってもらうという設計にしていました。

○片山委員 話が盛り上がるのであれば……。

○三上委員 違和感があると思います。

そのプログラムでは第3部では初めましての状態になるので、本来、ここでアイスブレイクが必要なのです。違うメンバーになつてしまふと、それだけでかちんこちんになつてしまふからです。そもそも、同年代でなぜやるかというと、他の世代といきなりやっても溶け合わないというか、なかなか議論にならないからということで、同年代でやつたらそれはそれでいいよねとなるのですが、同年代の方にとつてみれば、いろいろと意見は出したけれども、第3部からが始まりで、緊張する人たちといいますか、大人と向き合い、どうも、初めましてとがちがちになつてしまふと思います。そんな中でも後半で発表があつたように僕らはこう思いますというのは言えると思います。

ただ、第1回目でアイスブレイクをなぜやるかというと、初めましての人がいるからなのです。ですから、初めましての第3部の前にもアイスブレイクを10分程度取るといいますか、簡単な自己紹介とちょっとした話をする時間が必要なかなと思います。議論を促進するためのアイスブレイクです。

○オブザーバー（斎藤広報部長） 結構タイトで、かつかつなので、あまり足しにはならないかもしれません、1発目のアンケートは家で書いてきてもらったらどうでしょうか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） そもそも紙の想定だったのですけれども、先ほどまでのご議論をお聞きすると、途中、どこかのタイミングでアンケートをしたほうがよいのではないかというご意見もあったので、アンケートフォームみたいなものをあらかじめ用意しておき、自分のスマホなりから投票していただくような感じはでき得るのかなと感じました。ですから、家などからオンライン上で取るということもできるのかなと思いました。

○鈴木座長 ただ、デジタルデバイドには少し配慮をしたほうがよろしいかもしれません。場合によっては、QRコードをテーブルに置いておくといいですね。最近は飲食店でもそういう形式になっていますので、そこはまた考えていただくということでお願いいたします。

○梶井委員 2回目の会議のときに、第3部は新しいグループになる、混成グループになるということで、いろいろと皆さんからご意見がありましたけれども、2回目の市民会議のときには、第2部の途中で、後半30分、各グループ、年代ごとの意見発表がありますよね。やっぱり、ここが一つのポイントだと思います。

今まで20代なら20代だけで話し合っていたわけですが、ここで初めて70代のグループの意見や40代のグループの意見など、何となくまとまったものを聞くので、ある意味ではこのときにアイスブレイクといいますか、第3部に向かっていくときの心の構えができるのではないかでしょう。今まで同じ世代同士で話していたことと違う視点の方が今度は同じグループに来るのだなということで、年代ごとの意見をここで発表させるというのはなかなかうまく考えられていて、第3部を迎えるまでの大きな一つの準備の時間になるのかなと感じました。

○鈴木座長 会場の雰囲気もありますけれども、そこで事前に仕掛けられるようなことがあればと思います。

○三上委員 発表のときはメインファシリテーターの腕の見せどころではないでしょうか。年代別に、ここが違っているのですね、これを聞いてあそこにいる人たちはどう思うでしょうかといったやり取りをし、ちょっと和らげるといいますか、意見が違ってもそれは受け止めるのだということでのやり取りをしたほうがいいかもしれませんですね。

○鈴木座長 いずれにしろ、第3部はメンバーが入れ替わりますので、自己紹介ぐらいはしていただいて、議論をスムーズにするような仕掛けは必要かなと思っています。

いろいろと意見をいただきましたが、ただいまの市民会議の内容につきまして、また、全体を通してご意見はございませんか。

○野田委員 できれば、アンケートは家ではなく、その場のほうがいいのですけれども、時間がない場合は仕方がないと思います。あまりいろいろと調べて書いてこないようなアンケートなので、家でもできないことはないかなと思います。ただ、その場のほうが同じ

ような条件で回答したということになるので、できればそのほうがいいのですけれども、スケジュール的に致し方ないということであれば、それでも結構かなと思いました。

○鈴木座長 当日、ぎりぎりに来る方がいらっしゃるかもしれませんけれども、5分前や10分前に来られる方も多いと思います。受付で渡して、始まるまでに書いてくださいというやり方もあると思いますので、そこはいろいろと考えていただければと思います。よろしくお願ひいたします。

ほかにいかがでしょうか。

(「なし」と発言する者あり)

○鈴木座長 たくさんのご意見をいただき、ありがとうございます。

時間が結構たってしまいましたので、議事（2）の新たな市民参加手法などの運用ルールの検討について移ります。

資料2を用いてご説明をお願いします。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 資料の5ページと6ページが該当します。

これまで意向把握や市民参加の手法を中心にご議論をいただいてまいりました。かつ、まだ実験の最中ではございますが、この第5次市民自治推進会議も終盤に差しかかってきています。そこで、残された検討課題である運用ルールの議論に入ってまいりたいと考えております。

まず、5ページをご覧ください。

ページの上部の文章ですが、事務局といたしましては、現在、検証中であります新たな意向把握手法と市民参加手法、これらの新たなツールを市政に導入していくに当たりまして、それらの実効性の担保を行う必要があると考えております。

SNSを活用した市民全体の意向の把握、これはサイレントマジョリティを含むものと考えておりますけれども、それらやミニ・パブリックスの活用など、現状で想定される新たな手法、ツールの特性を十分に生かしたルールを検討していく必要があると考えているところです。

左下の図をご覧ください。

まず、運用ルールを考える前に、今一度、用いるツールの整理をしておく必要があるかなど考えまして、ご用意したものになります。

この図の左の三角形の縦軸は、市政への参加意欲、それから、横軸は各層の人数を表現したものになります。

一番上の参加の丸のところは、右に列記しておりますツール、パブコメ、ワークショップ、その他のツールを通じ、既に現状でその方々の意向が表面化している層とのイメージで記載しております。

その下の薄い紫色の部分ですけれども、便宜上、関心層、無関心層という層を設定しておりまして、これらをまとめてサイレント層というグルーピングにしております。

関心層につきましては、市政に関心を持っているけれども、意見や考えは自ら言わず、

もし聞かれたら答えるというようなイメージの層です。また、一番下の無関心の層は、そもそも市政に関心がない、あるいは、情報がほとんど届いていない層と仮定をしております。

これらのサイレント層には、右の図の中、点線の中に記載をしておりますSNSを活用したアンケート、札幌版のミニ・パブリックスなど、手軽さがある、あるいは、参加を後押しするような仕組みが有効なのではないかと考えております。加えまして、デシディムなどに代表されるデジタルプラットフォームです。例えば、デジタル上であれば市政に参加してもいいというようなお考えの方々には機能する可能性があるのではないかと予想しております。

このデジタルプラットフォームについては、残念ながら、今のところ、今年度内に検証できるような見込みはございませんけれども、次年度に向けて、効果検証ができるように、実験についても検討を進めてまいりたいと考えているところでございます。

どの手法も、テーマや実施側である札幌市の工夫に応じ、どの深さの層まで作用するかはある程度変化するのではないかと予想しております。その一方で、これまでご指摘があったように、どこまでいってもサイレントマジョリティの方たちはサイレントマジョリティなのではないかという考えは持っておく必要もあろうかと考えております。

いずれにしましても、この図に関しては、残された期間で、もう少し事務局としても精査したいと考えておりますが、現状、このとおりの整理とさせていただきたいと思っています。

次に、右側の図をご覧ください。

こちらは、ルールの適用のイメージです。

左の従来型の政策形成過程につきましては、例えば、市が十分な意向把握や市民議論の機会を経ずに素案を固めてしまった場合、その素案に対して意見が対立するような論点が含まれているテーマであった場合にはマスコミやその案件に対して強い関心がある特定の市民の方などの意見が大きく影響し、進捗がまれに停滞することがあるものと考えています。

そこで、右の新たなルールの適用という図のように、市は政策形成・立案のなるべく初期の段階において、新しいツール、それから、ルールを組み込むことによって、市民全体の意向や市民議論の結果などを反映して素案を作成し、それを提案していくというようなイメージのルールが望ましいのではないかというのが事務局としての考え方です。

この市民議論などを踏まえた上での素案に対しては、多くの市民にとっては恐らく一定の納得感が得られたものであろうといったこと、あるいは、マスコミや一部の大きな声に対しても市民の意見を踏まえた上での提案であるというような行政側の説明のしやすさといった効果も期待できるのではないかと考えております。

図の下の説明のところをご覧ください。

基本的には、市民参加の推進のためのルールについては、今後も、事案の内容に応じて、

新たなツールを加えた上で様々な手法の組合せによって政策形成を行っていくというような考え方を維持することは必要だと考えております。

ただし、大きな市政課題の方針や施策を決定する場合、かつ、市民生活に与える影響が大きい事案については、仮に事業が停滞するとなると、市全体に大きな影響が出ます。したがいまして、市民全体の意向や市民議論の結果はどうなのかといったことを踏まえた上で意思決定権者の判断が下される必要性が高いというふうに思われますことから、SNSを活用したアンケートや市民討議、ミニ・パブリックスを組み合わせた上での新たな仕組みを用いた結果を判断材料の一つとして活用していくというようなイメージで考えております。

ページをおめくりいただきまして、6ページをご覧ください。

今、5ページでご説明した内容をどのようにルール化していくのかについてですが、私どもとしては、ガイドラインの作成を目指すのがよいのではないかと考えております。

具体的には、上部の説明ですが、市役所内部の情報提供、市民参加のルール、内部的にはございますけれども、新たなツールの内容や背景、運用に当たっての考え方をそこに加えまして、まずは職員への浸透を図ることが必要になってくると考えております。また、市民と市役所が一緒に考えて市政課題の解決を図っていくというビジョンのためには、市民の方々に求められる役割も明確化していくことが必要なのではないかと考えております。

こうしてガイドラインを作成した暁には、行政運営の透明性の向上のほか、市の方針や手続を市民の方々に理解してもらい、そして、市政の協力を得やすくなり、さらには、職員の業務の効率化が見込まれるのではないかと考えております。

そして、その下の表ですけれども、ガイドラインのイメージです。あくまで、これを作成した場合にこのような構成がよいのではないかというものを記載したものとなります。

例えば、この表上では、第1章から第5章までの各章に分かれておりまして、第1章では、情報共有、市民参加の目的、第2章では情報共有の推進、第3章は市民参加の推進、そして、第4章では市民の役割といったところを記載し、最後に、第5章で評価という構成しております。

第1章では、情報共有、市民参加の目的、背景、必要性などを記載し、それらを共有するということです。そして、第2章と第3章は、それぞれ情報共有の方法や市民参加の方法の実施時期といいますか、こういうタイミングではこういう手法を用いたほうがいいのではないかということとそれらのポイントを記載するイメージでいます。それから、第4章では、市民の方にとってこういう情報収集の方法がありますよということや意見の提出方法、参加の機会としてこういったものがあるという紹介をします。また、市民モニターリング制度ということで、仮称・市民サポートーズと記載をさせていただきましたが、いわゆる市民モニターのイメージであり、登録していただいた方に対してアンケートを定期的に実施し、回答していただくということです。それも、一度登録していただいた後は継続的に参加をしていただきまして、例えば、その方の過去からの回答などをたどっていけると

面白い試みになるのではないかと考えているところです。

最後に、第5章では、作成しただけでは満足してはいけないと考えておりますので、定期的にガイドラインがしっかりと機能しているかどうかという評価を、それから、内容もその時代に合わせて見直していく必要があると考えておりますので、第5章として章立てしているところです。

以上、ご説明いたしましたとおり、事務局としては、まず、このようなガイドラインを設け、市役所内のみならず、市民の方々にもそのルールの周知、浸透を図っていくことによって市全体の市民自治といったものが根づき、将来的に育っていくような試みになるとよいのではないかと考えているところです。

この点について皆様にもお考えをお聞かせ願えれば幸いです。

事務局からは以上でございます。

ご議論のほど、よろしくお願ひいたします。

○鈴木座長 イメージということではございましたが、非常に分かりやすく、図で表現していただけているかと思います。

もう一つ、今後のルールづくりといいますか、ガイドラインというご提案もいただきましたが、そういったものをまとめ、今後、適用する、浸透を図っていくということだったかと思います。

この運用ルールの検討についてご意見やご質問等はございませんか。

○梶井委員 具体的なイメージとまだ結びつかないのですが、6ページのガイドラインのイメージのところです。

まず、第5章が一番難しいし、重要なところかなと思いました。このガイドライン自体を評価する、見直しするということですけれども、ここではっきりとさせていただきたいのは、具体的にどのような観点で何を評価するのかです。当然のことですけれども、ここが一番難しい部分かなと感じました。

それから、第4章の市民の役割についてです。

固定観念かもしれませんのが、こういうものでは、市民、行政、事業者の役割がセットになって入るのが大体の場合ですよね。ここでは市民の役割だけを表現するということであれば、それはそれで、そういう目的なのだろうと思いますが、行政の役割のようなものも併せてあったほうがいいのかなと思いました。

○鈴木座長 そのほかに何かございませんか。

○三上委員 このガイドラインの中では、例えば、まちづくり人を育てる仕組みとあります。また、今回のようなミニ・パブリックスっぽいワークショップ、あるいは、以前も話したかもしれませんけれども、札幌市の認定ファシリテーターを募集しておけば、事前に年間2回ぐらいの研修が受けられ、いざ、こういう市民会議をやるときにということですね。というのも、ファシリテーターが不足していることがほとんどでして、札幌市が認定した色のついていないフラットなファシリテーターを育てておくということで、そういう

う人たちのコミュニティーもうまくできると思いますが、そういう認定制度みたいなものを持っておくと、会議をやるときにも悩まずに済みますし、プログラムや足周りといったいろいろなものは業者に全部任せ、例えば、ファシリテーターが必要なときは札幌市認定の人を半分は使ってくださいとすると、フラットな議論ができるでしょうし、合意形成に強引に持っていくかしない仕切りテーターみたいな者もいなくなると思います。

札幌市自体の市政のいろいろなワークショップをやるとき、業者も人手不足なので、そのときに札幌市の認定ファシリテーターであれば信頼して使えるとなるでしょうし、そういう仕組みづくりも可能性として載せられたら面白いなと思いました。

○鈴木座長 認定ファシリテーターという話もございましたけれども、そういう制度もできれば、ある意味、市民と一緒に育っていくといいますか、議論を活性化させることができます市民を育てていく動きにもつながる可能性がありますね。

そのほかに何かございませんか。

○片山委員 私の専門外のことですが、従来型の政策形成過程の中の素案のところにマスコミや特定の意見が影響とありますよね。新ルール＋ルールのところにはマスコミの存在が書かれていませんが、マスコミとのコミュニケーションはすごく大事だと思うのです。市民が適切な距離感を持つことや私たちのような推し進める側がうまく味方につけることも含めてのことですが、どう考えていらっしゃいますか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 図上ではマスコミの記載が消えておりますけれども、片山委員のご指摘のとおり、マスコミの方にも市政情報の広報に協力していただくという観点は非常に大事だと感じておりますので、むしろ、味方についていただき、市政への理解を促進していくという必要はあると感じております。

○事務局（神市民自治推進室長） 補足します。

この新たなルールといいますか、ここでやろうとしているのは、大きな市政課題の方針や政策を決めるときで、それが市民生活に大きく影響することです。でも、それはマスコミにとっては興味のあることですし、題材になりますから、こういったことをやるときには、当然、こういった議論をするということはマスコミにも事前に話をします。これにより、立案をする段階でマスコミの方がそういったことを知る場面も多くなるでしょうし、取材もしてもらいたいと思っていますし、一緒に情報発信をしてもらいたいと思っています。きっと小さなことには興味を示してもらえないかもしれませんけれども、大きいものであれば、当然、マスコミにも必ず興味を持つてもらえるものだと思っています。

○片山委員 先ほどの梶井委員の話にもありましたように、章立てのところで、市民自治の話なので、市民という主語が多く出てくるのはもちろんですけれども、関係性で語ったほうがどう動いたらいいのか、どういう立場で発言したらいいのか、どう考えたらいいのかが分かると思います。ですから、行政や企業ですね。事業者はこの場合には入らないかもしれません、マスコミみたいなところも主体のありかとして出てきたほうがいいのではないかかなという気がしました。

○オブザーバー（斎藤広報部長） 広報部から話します。

今のお話の流れからいくと、仮にここにマスコミの役割と書いたとしたら、マスコミは大激怒すると思います。彼らは彼らの自立性を持ってやっているので、こういう役割がある、こういう立ち位置でいろということは一切言われたくないので、そこは触れないほうがいいかなと思います。

○鈴木座長 ここにマスコミという言葉が入ってしまうと、ある対象を持って入れているようなイメージにもなりますので、あえて入れなくてもいいのかもしれませんね。それに、マスコミというものは、マスコミュニケーションですから、情報を市民に知らせるという大命題があります。

そういう意味では、影響するということですから、別に書いてはいけないということではないのですけれども、十分な情報がない中での風潮やイメージが蔓延なのかどうかは分かりませんけれども、そういう状況になってしまいというようなことですよね。

○事務局（川村市民自治推進課長） 例えば、市役所が何かを進めようとして、素案を公表して、マスコミが悪いと言っているわけではなく、一部の特定の考え方を持っている方をマスコミで取り上げた結果、それが大きく影響して物事が進んでいかない、そういうことがなきにしもあらずなので、それをイメージした図になります。ですから、何でもかんでもマスコミ対策ということを意図しているわけではありません。

今、マスコミの話がありましたけれども、当然、我々も市民に情報を提供、共有していく中で絶対に活用しなければならないツールだと理解していますので、第2章の情報共有の推進の中で触れていくことになるのかなという想像はしています。

○オブザーバー（斎藤広報部長） マスコミという観点で補足させていただきますが、今、課長が言っていたそういう事例があるというもので一番分かりやすいのが敬老パスです。

梶井委員にもいろいろとご尽力をいただいていると伺っているのですが、敬老パスは、使われている高齢当事者の方々が反対の声を物すごく上げていらっしゃいます。その声がすごく大きいですね。それは市民の声として重要なのですが、その声が非常に大きく、メディアはそれを取り上げます。一方、若い人の声というのは意外と表面に出てこないのです。このように、利用されている高齢者の声だけが取り上げられていますし、そういう声を上げている方たちはその声が市民の総意だというふうに思っていく過程があります。

これはオリンピックのときにもほぼ同じような傾向があったのです。もちろん、いろいろな意見があつて構わないのですが、それが総意だと思ってしまうところがあります。

例えば、資料の新たなルールの適用のところに全体の意向を把握するとありますよね。これが基本でいいと思うのですけれども、場合によっては全体の意向を把握する必要がない場合もあると思うのです。例えば、敬老パスについてLINEでアンケート調査を行ったとき、LINEを使えるような若い方たちの意見は集約できますよね。でも、LINEを使えないお年寄りの方もいらっしゃいますから、それは決して札幌市全体の総意ではないわけです。ただ、そういう意見を集約し、そういう意見もあるということを見せていく

ことが重要になってくる場面もあるのです。直接的な声の大きな方たちの意見もありますが、そうではない方たちの意見もあるということを見せていくことが非常に重要な場面となるときがあるのかなということです。

資料の左側の図でいくと、参加、関心、無関心の全体の意見ではなく、関心、無関心の意見だけを見せることがあってもいいのかなと思います。

○鈴木座長 結構、テーマにもよるのかなと思います。我々の会議の集大成ではないですが、そういういたイメージはつくる必要があると思うのですが、やはりケース・バイ・ケースみたいなところもありますし、全部が全部、このやり方がいいということでは当然ありませんので、表現については会議の中で考えていくべきかなと思っています。

○事務局（川村市民自治推進課長） 今回出しているのはあくまでもたたき台にすらならないイメージですので、次回以降はもっと具体的に踏み込んでいきたいと思っています。

○鈴木座長 野田委員、いかがでしょうか。

○野田委員 このガイドラインをつくる意味は、今回、新たなツールの信頼性を確保する上で、特に政策決定時に必要となる情報共有や参加の客観性を確保することと理解します。ですから、このツールというのはやっぱり重要なものですよとみんなから信頼してもらうためにつくるものであって、そのためのガイドラインの中身として、情報共有や参加の客観性が担保されていますということが書かれている必要があるだろうと思っています。そして、構成として、その中に客観性を書けばいいのかなと思いました。

もうちょっといろいろと出てくるかもしれません、一つ気になったことがあります。これはまだ結論が出ていないのですけれども、この手の話をするときに、センシティブな情報の取扱いです。特に、個人情報の保護みたいな話で、どうやって保護するのかということもあるのですが、そういうことは特に気にしなくていいですか。

当然、行政がやっていることですから、行政が行うこと全般について個人情報の保護に配慮しながらやっていることになるので、問題はないですし、特に書く必要はないのかもしれませんけれども、将来的に、このツールは、マイナンバーカードのように、カードリーダーに差して、電子投票みたいなものに使えるようになれば非常にいいなと思っています。

ただ、そうすると、個人情報の漏えいみたいな問題も出てくるかなと思いました。あるいは、情報の共有というとき、これは個人情報ではないかと気にし出したりすると共有できなくなったりするので、その取扱いをどうすればいいのか、答えは出ないのですが、個人情報やセンシティブな情報についてもきちんと配慮しますということをここであえて言うべきか、市全体でやっているから別に言う必要はないのか、そこがちょっと気になったということです。

○事務局（川村市民自治推進課長） 基本的には、市の個人情報保護条例など、いろいろなものに包括されているという考え方もあるのですが、今の野田委員のご意見を聞いて、はっとしました。結局、これでは、デジタル技術を用いて情報を集めることや市民モニタ

一ということも考えているので、情報の取扱いについても章立てするということも必要なと思いましたので、組み込んでいきたいと思います。

○鈴木座長 そのほかに何かございませんか。

(「なし」と発言する者あり)

○鈴木座長 最後に、事務局から確認したいことはございませんか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 確認という意味ではないのですが、本日の議事の一つ目で、様々な修正案、ご助言をいただきましたので、早急に修正します。会議外ではありますが、委員の皆様とも共有しながら進めてまいりたいと考えておりますので、引き続きご協力をお願いしたいと思います。

○鈴木座長 それでは、全体を通して皆様からございませんか。

(「なし」と発言する者あり)

3. 閉　　会

○鈴木座長 長時間にわたり、ご議論をいただきまして、誠にありがとうございます。

以上をもちまして第7回第5次市民自治推進会議を終了させていただきます。

どうもありがとうございました。

以　　上